

浄瑠璃寺：本堂

浄瑠璃寺の本堂は日本の国宝に指定されています。1107年に完成し1157年に現在の場所に移転しました。平安時代（794－1185）の仏教建築がよく表されています。また、寺院の中央の池の西岸に適切に位置しており、その中に祀られた阿弥陀如来仏とのつながりを表しています。

本堂には、浄土の主である阿弥陀如来の9つの木像が祀られており、本堂には扉が仏像と同じ数つあり、その後ろに仏像が並んでいます。阿弥陀如来は西方極楽浄土の主と呼ばれ、深く純粋な知覚を持っていると信じられています。また、人々を必ず極楽浄土へ導くとあります。文献からは、12世紀中に、貴族や皇族の要請を受けて、多くの9体の阿弥陀如来を祀った寺院が建てられたと言われています。浄瑠璃はこの時に建てられた寺院の唯一現存する寺院であると考えられています。9体の阿弥陀如来像は、9つの往生の段階があるという考え方を表しています。

本堂内の中央にある一番大きい阿弥陀如来像は、11世紀後半に九体の中で一番初めに作られ、その他の8体は12世紀初めに作られました。これらの仏像の表情と、頭の後の光輪のモチーフはそれぞれ異なっています。これらの仏像は、寄木造の手法で作られ、いくつかの加工された木材をつなぎ合わせて作られており、中は空洞になっています。一番大きな阿弥陀如来像が修復された際、阿弥陀如来がモチーフとなった木版画が仏像の中からいくつか発見されました。これらの木版画は、仏像が作られた当時から存在していたと考えられています。